HOPE Bourgogne

オータンのサン・ラザール教会

文芸評論家 饗庭　孝男

あえば・たかお
1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。
著書に、『石と光の思想』(勁草書房)、『小林秀雄とその時代』(文芸春秋)、『恩寵の音楽』(音楽の友社)、『西欧と愛』(小沢書店)、『幻想の都市―ヨーロッパ文化の象徴的空間―』(新潮社)、『ヨーロッパの四季』(東京書籍)など多数。

エヴァ

魂をはかる

パリからオータンへの道はサンスからオーセール、アヴァロン、ソーリュを経て入るのがふつうだろう。ゆるやかなイヨンヌ河の流れは優しい。県道980からオータンの町へ入る。ローマ占領のガリアの時代、この町はガリアの首都であり、オータンという名前は、ローマ皇帝アウグストスからとったものである。ついでに言えば、ブルゴーニュという名前も、5世紀にバルト沿岸から移動してきたブルグンド族から来ている。

今は粗い印象を与えるが、サン・タンドレ門はローマ時代のものであり、かつては城壁がまわりを取巻いていたのである。町の通りは狭いが、家並はほぼ三階くらい、曲折する道から教会前広場に出る。正面を眺めようとすると、少し幅がなくてきゅうくつな感がする。

1120年頃に教会はたてられはじめた。ジェラール・ド・ルションが1079年にマルセイユから待ち寄った聖ラザールの聖遺骨が祀られたために各地から巡礼がおびただしくあつまったのである。当時にしては珍しく彫刻家、ジルベルトウスの名前が楣石(まぐさいし)の上部に刻まれている。半円形壁面の主題はこの時代に多い「最後の審判」であり、左側が選ばれた人と、右側が地獄に堕された人々と分かれる。そうした点ではコンクのサント・フォワ教会の正面と同じである。

ロマネスクの時代は「終末の日」が近づきつつあるという確信が人々をとらえていたから、どうしても善悪二元論のきびしい様相が芸術表現に多かったのである。いわば思想として黙示録的であり、その意味ではモワサックのサン・ピエール教会の半円形壁画が典型的だろう。

この教会は土地から出る砂岩を用いているため、サント・マドレーヌ教会のように白く明るい印象ではなく、灰色に、場所によっては暗く沈んだ調子(トン)である。しかし全体として諸人物はまるでマニエリスムの彫刻や絵画のように長く洗練されていて、優雅である。コンクの人物たちはずんぐりとして、時には可愛らしくさえあるが、この教会の諸人物はサント・マドレーヌ教会と似て、その衣紋の繊細な流れが印象的である。

右側に魂をはかる場面がある。これはフランスのみならずイタリア(たとえばウンブリアのスポレットにあるサン・ピエトロ教会)にも見ることができ、エジプト起源である。いわば先行する異文化の組み入れだ。聖ミカエルが悪魔と対峙し、後者の足には蛇が巻きついている。

しかし何よりもまして身廊に刻まれた柱頭彫刻は美しい。≪ゾディアック叢書≫が「比類なく」、ロマネスク彫刻の傑作とたたえるゆえんであろう。たとえば「マドレーヌにあらわれたキリスト」は、やや左に身をかがめ、手をひらき、優美な身のこなしで膝づこうとするマドレーヌを見下ろしている。マドレーヌの斜に下ろした手と平行する膝から足にかけての線も見事だ。あるいは「東方の三博士の礼拝」における聖母子は仇気なさ、無垢と清純の姿で見るものの心をとらえてしまう。均衡としなやかさは間然とするところがない。

それに「東方の三博士の目覚め」はどうだろう。三人が並んで眠りこんでいるところに天使がそっとあらわれる図である。三人を包んでいる半円の衣の縁どりと博士たちの冠。天使の翼の線の美しさは、ほぼ直方形の枠組のなかに絶妙なバランスをもって夢みるような印象を与えるものである。これらを刻んだ人々の名は知られていない。彼らは共同体のためにつくったのであって、自らのためではなかった。ジルベルトウスはむしろ例外である。

ところで楣石(まぐさいし)のところに本来おかれていた『エヴァ』は今、教会のかたわらにあるロラン美術館のなかにある。大ぶりの植物文様のなかに、それと見まがうようなエヴァの肢体は、官能のリアリズム的表現というべきで、横顔と長い裸身と、ゆるやかに曲げられた膝、リンゴをつかんだ手先、「誘惑」そのものの表れである。その迫真性のゆえに、これを眺めた人は、いましめよりも逆に、それに呼応するものを「内なる自然」に覚えたのではないか、という感を与えるほどである。それと同じことは、宗教改革者、マルティン・ルッターの友人でもあったクラナッハの描く妖しいまでの女たちにもうかがうことができる。むしろ女の美しさそのものの表現がキリスト教的制度をこえてそこにあらわれていよう。いや、逆に禁忌があるから美しいのかもしれない。

さて何度かオータンを訪れたなかで、私に思い出ふかいのは、とある古い木造りの建物をつくりかえたホテルに泊まった夜のことであった。ブルゴーニュ地方のことである。さまざまな教会を訪ねたあと、中世より修道院がつくった葡萄酒を味わうよろこびは格別なものがあった。クロ＝ヴージョやニュイ＝サン＝ジョルジュの芳香に私はすっかり旅のつかれをいやされたものである。

Château de Chailly
シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか?数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

問い合わせ先:㈱佐多商会　ブルゴーニュ事業部へどうぞ
TEL:03-3586-4558(東機貿ビル内)　担当:岩沢、田中